

資料編

都市計画マスタープラン作成にあたって

●学校法人福岡大学との連携・協働の経緯と成果

>> 学校法人福岡大学との連携・協働による受託研究の経緯

本市の将来を担う都市まちづくりの指針となる「津久見市都市計画マスタープラン」の改訂にあたっては、「学校法人福岡大学 工学部 社会デザイン工学科 景観まちづくり研究室（研究代表者 柴田 久 教授）」との連携・協働による「受託研究」という形で令和元年6月にスタートしました。

同大学の研究室は、福岡県、佐賀県、大分県や県内他の自治体などでの都市まちづくりの実績もありますが、本市においても、平成22年7月に供用開始した千怒地区の「湧水めだか公園」、市中心部のまちづくりをテーマに大分県と連携し、平成27年度から3か年にわたり実施した「津久見観光周遊性創出事業」（※コンテナ293号、Cafe1/2などの取組）、平成29年9月の台風第18号災害直後に着手した津久見川・彦の内川の激特事業に併せ、津久見市立第一中学校生徒の参画のもと、令和元年から3か年にわたり実施した「津久見復興街なか・にぎやかプロジェクト」、令和2年度から実施している「都市再生整備計画事業（まちなかウォーカブル推進事業）」など、10年以上にわたり本市の都市まちづくりに関わっていただいています。加えて、研究代表者の柴田久教授については、「津久見市庁舎建設専門家検討委員会」において委員長を歴任し、これまで12回にわたる専門家検討委員会を総括してきました。

このように、同大学の研究室は本市の実情に精通しており、さらに、住民とのワークショップや現地調査などの実績も豊富なことから、現況・課題を的確に整理し、全体構想・地域別構想をまとめ、財政状況を鑑みた上で、より実現可能性が高い方策を掲げ、その実現プロセスについて整理していくこととし、そして、それらを研究課題として掲げ、地域住民の意向を十分に反映させ、大学と行政の連携・協働による共同研究で成案化を目指していくこととしました。

加えて、本マスタープランの根幹であり、本市のまちづくりの大きな課題となっていました市中心部のまちづくりについても、同大学の研究室が長年にわたり培ってきたノウハウが生かせるのではと考えました。市中心部は、平成29年9月の台風第18号災害にて甚大な被害を受け復旧・復興の各種事業を実施してきました。現在は、津久見港埋立地における新庁舎と街なか観光拠点の一体的整備を目指した取組を進めていますが、あらためてJR津久見駅から概ね半径1km以内を市中心部（中心市街地）と定義し、今後10年以内に取り組んでいく必要のある事業を整理し将来イメージ図を示した「津久見市ランドデザイン構想」もあわせて取り組んでいくこととしました。

このような経緯から、全国的にも事例が少ないと思われる、都市計画マスタープランの改訂作業を同大学の研究室が主導し「受託研究」として実施することとなりましたが、本市としましても、このような手法が最も効果的・効率的であり、加えて、先駆性、話題性も帯びていると考えました。

>> コロナ禍で遅滞した業務スケジュール

本マスタープランの改訂作業のキックオフとなったのが、同大学の研究室が主導し令和元年11月14日に開催した「グランドデザインワークショップ」でした。産業・福祉・教育・まちづくりなどの各分野の市民や団体、商工会議所、市職員のほか公募による参加者もあり、学生のコーディネートのもと多くの意見が出され十分な成果を得られました。

しかしながら令和2年に入り、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の全国的な感染拡大により、緊急事態宣言が発出されるなど業務スケジュールは大きく遅滞しました。当初、令和元年度から2年をかけ改訂作業を行い、令和2年度末の業務完了を目指していましたが、やむなく令和3年度も引き続き業務を継続することとしました。

>> 研究室の実績とノウハウによりコロナ禍を克服

この間、「グランドデザインワークショップ」に引き続く、ワークショップや説明会などの開催が困難となったことは紛れもない事実です。市民や団体の都市基盤整備や公共交通、防災、景観などに関する考え方、地域の特性や課題の把握と将来像などは、市民の声を的確に把握し本マスタープランに反映させていくことで、住民主体のまちづくりのための基盤が構築されると思われます。今回はコロナ禍でその機会を失いましたが、同大学の研究室が有するこれまでのワークショップや調査などの実績やノウハウが、それらをカバーし改訂作業を進めることができました。しかし、改訂案を取りまとめていた時期に第5波、令和4年に入り業務の最終盤で第6波に見舞われ大変困惑しましたが、2年間のコロナ禍を克服しどうにか「津久見市都市計画マスタープラン(改訂案)」、「津久見市グランドデザイン構想(案)」が作成できたところです。

>> 受託研究の成果と全国への発信

これまで、10年以上にわたり、同大学の研究室に所属する学生が、本市を訪れ、ワークショップなどでの市民との交流、現地調査等を行ってきました。また、本マスタープランの改訂作業においても、多くの学生の参画があるなど、今回の「受託研究」は、これまでの実績とノウハウにより実現したと言えます。成果としましては、本マスタープランやグランドデザイン構想を作成したことのみならず、将来の我が国を担う若者の人材育成・発掘にもつながっていると思われ、これは、大学との連携・協働の大きな意義と成果ではないかと考えます。

全国的に見ても、大学が業務の一部に関与しているケースは多々あると思いますが、「都市計画マスタープラン」の策定や改訂を大学が主導した事例は多くないと思われることから、大学と行政・市民との連携・協働の取組として、全国の先進事例となるのではと考えています。この成果を、全国に発信しPRを行うとともに住民主体のまちづくりの起爆剤になればと期待しています。

●グランドデザインワークショップの開催 令和元年11月14日（木）

市はグランドデザイン構想の策定に先立ち、各分野で活躍されている市民の皆さんから様々な視点で意見を聴取するため「グランドデザインワークショップ」を開催いたしました。参加したのは「商工」「産業」「福祉」「交通」「防災」「教育」「まちづくり」など各分野で活躍されている市民の方々、さらに一般公募による市民に加え、津久見市職員や本ワークショップの進行をつとめた福岡大学景観まちづくり研究室の方々です。グループ作業では①今後の津久見市におけるまちづくりのポイント ②今後どのような取り組みをおこなってほしいか ③津久見市の将来像に対する意見といった3項目を中心に、意見の共有や活発な議論がなされました。

参加者の皆さんからは、「具体的なまちづくりについて理解しやすかった」「津久見市がどのように考えているのかを知る材料となった」「今後の津久見市が向かう方向と可能性が見えて来た」「実現できるよう協力していこうと前向きな気持ちにさせてくれた」「メリットもデメリットも発見しやすい」「全体的にまちが見渡せて計画が立てやすい」といった感想をいただきました。

>> ワークショップの様子



グループワーク①



グループワーク②



グループワーク③



グループワーク④



各班ごとの発表（意見共有）



将来イメージパースの説明



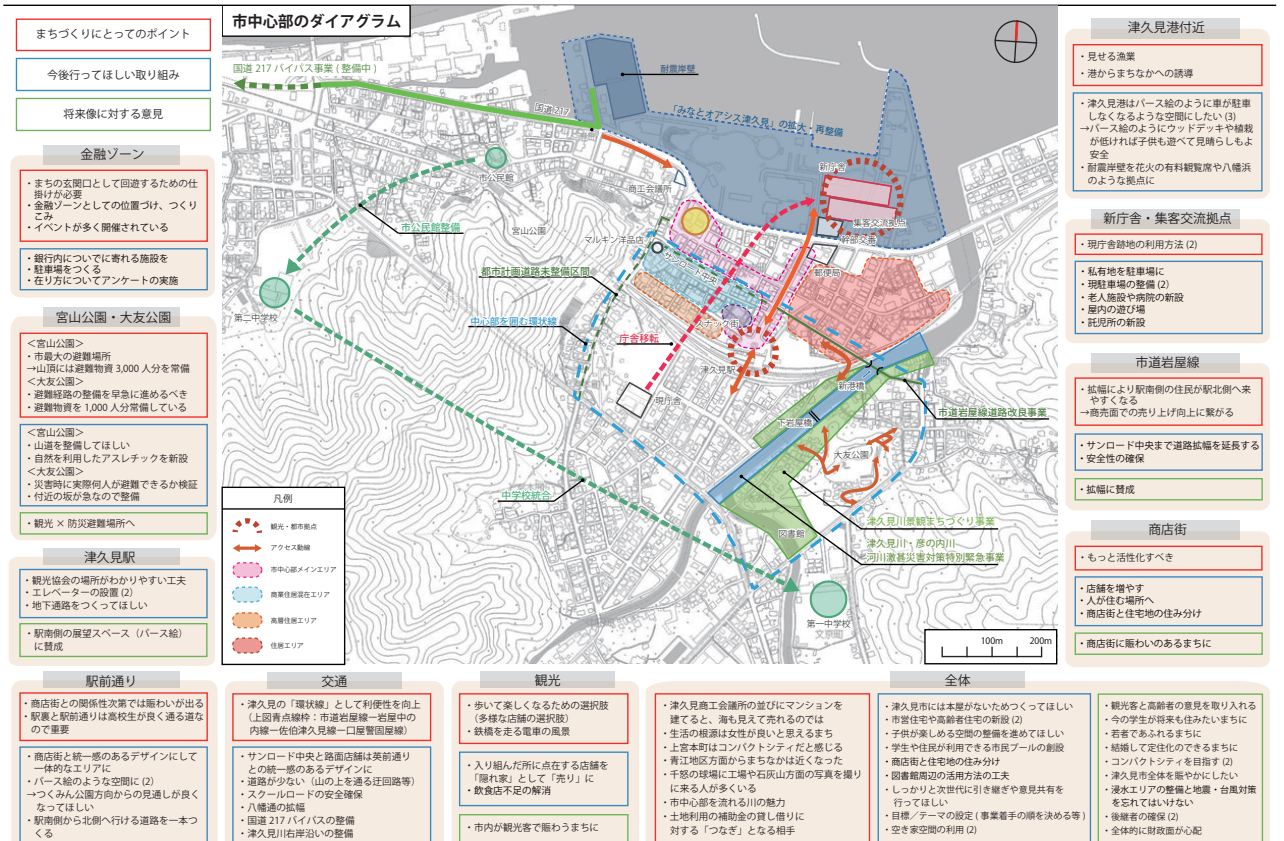
各班意見のとりまとめ（全体共有）



各班意見のとりまとめ（全体共有）

>> ワークショップの意見まとめ

11月14日グランドデザインワークショップ意見まとめ



●業務内容の整理

>> 将来イメージ図

ランドデザインワークショップでは、総合的な将来ビジョンを描き、市民の皆さんと共有する必要がありますと考えました。まずは地図や図面だけでは表現できない将来像をイメージ図として描き、市民の皆さんに見ていただくこととしました（JR 津久見駅周辺、市道岩屋線の様子など）。またワークショップ後には、津久見港埋立地における新庁舎と街なか観光拠点の一体的整備計画、市中心部の円滑な移動を目的とした市道岩屋線の拡幅や岩屋三差路へのラウンドアバウト導入など、いくつかの主要な事業の将来イメージ図も併せて作成しました。



JR 津久見駅



JR 津久見駅前通り



新庁舎周辺



つくみん公園から新庁舎に続く歩道



市道岩屋線



津久見川周辺（岩屋三差路）

>> 現地調査など

令和元年度には、都市計画マスタープラン作成に向けて、福岡大学景観まちづくり研究室の方々と市による現地調査やドローンを使用した写真撮影、イメージパース等の作成をおこないました。



JR 津久見駅周辺の現地調査



JR 津久見駅前での実測の様子



学生も交えた打合せ風景



現地打合せの様子



水晶山跡地周辺



津久見川周辺



ドローンによる津久見港周辺の撮影



学生達によるイメージパース作成の様子

>> 地域別ヒアリング調査

さらに「第3章 地域別構想」を作成するにあたって、ワークショップだけでは知り得なかった地域の良いところや課題等の情報について、ヒアリング調査を実施しました。

津久見市では、以前から市中心部のまちづくりに関するワークショップなどを数多く開催し、多くの住民や団体の意見を把握してきました。今回の調査は、あらためて周辺地域の情報を収集し地域別構想に反映させることを目的とし、地区役員や地域で、まちづくり、防災、伝統芸能、文化・スポーツなどに積極的に取り組んでいただいている住民などの参加のもと、地域の特性、景観、防災、観光、住民まちづくり、公共交通などについての意見をいただきました。

実施日時は下記のとおりですが、コロナ禍でもあり、広い会議室で人数も数名に留め、感染防止対策を万全に講じ実施しました。

地域名	日時	場所	参加者数
千怒地域	令和3年6月29日 15時00分～	津久見市役所会議室	4名
上青江地域	令和3年7月8日 19時00分～	岩屋口公民館	11名
下青江地域	令和3年7月12日 19時00分～	津久見市役所会議室	9名
堅徳地域	令和3年7月13日 19時00分～	徳浦公民館	12名



住民の皆さんへの地域別ヒアリング調査の様子



アジサイ等の植樹活動（津久見・下青江地域）



災害時の避難場所となる大友公園（津久見・下青江地域）



耐震岸壁の活用（津久見・下青江地域）



災害時の避難路となる千怒越トンネル（千怒地域）



千怒崎から見える産業景観（千怒地域）



畑区から望む海側とは異なる市街地の風景（上青江地域）



避難場所となっている岩屋口公民館（上青江地域）



自主防災組織による自作の避難所（堅徳地域）



つつじの名所で西九州一の観音像がある海岸寺（堅徳地域）

地域別ヒアリング調査で使用した調査用シートの一例（千怒地域）

千怒地域 千怒地域の「守り続けていきたい良いところ」・「課題と思われる悪いところ」を教えてください。

① 景観について…残したい風景・好きな場所・改善してほしい場所など

地域別ヒアリング調査で使用した調査用シートの一例（堅徳地域）

[illegible]

活性化市民も参画

明日へ

津久見市長選を前に

①

今月14日の夜、津久見市 幅、市道の改良、中学校の津久見浦の市民会館会議室 統合……。JR津久見駅から約30人が集まった。商工半徑1キロ圏内では、さまざまな事業が予定される。グランドデザインはいわば、市中心部付近の10年後の姿。会議を開くに当たり、市は「市民と共に考えたい」と呼び掛けた。

市庁舎の新設、集客交流拠点の整備、津久見川の拡

- グランドデザインに関わる主な事業や案**
- ・市役所庁舎新設と集客交流拠点整備
 - ・津久見川の大規模改修
 - ・第一、第二中の統合
 - ・国道217号バイパス整備
 - ・市道岩屋線改良
 - ・市民図書館周辺の水辺利活用
 - ・市公民館の整備
 - ・金融機関が集積する「金融ゾーン」の整備

「安心安全に暮らすには何が必要か」「人を呼び込み、定着させる施設や市内の交通はどうあるべきか。班ごとに分かれた参加者は、思い思いの津久見の未来を地図に落とし込んだ。福岡大景観まちづくり研究

行政の後押しが不可欠

室の力も得ながら、グランドデザインは2020年度中に完成させる。

市内では17年9月の台風

被害などをきっかけに、市つり、ハロウィーンイベントの動きに変化が出ていなど、市民有志が主体となる。津久見の暮らしを体感 なるて催しを次々に開催する「津つばく」やパンま 市内を活性化させている。



「グランドデザイン」を話し合う市民ら。津久見市の未来予想図についての議論は熱を帯びた＝津久見市津久見浦

「これまで市民はまちづくりに消極的だった。人が減り、活気が失われる中、自らが古里を思い、行動する大切さを認識したのだと思う」。16年に発足したまちづくり団体「ツクミツクリタイ」代表の高瀬幸伸さん(46)は現状をこう説明し、「行政には市民活動の火種となる仕組み作りや情報発信を強化してほしい」と訴える。

行財政基盤の強化などを目的とした平成の「大合併」で、単独の道を選択した津久見市。山積する市政課題に今後も厳しい行政運営を強いられる。まちづくりに関わる市内の40代男性は「従来の価値観やしがらみにとらわれず、市と市民が一丸となることが大切だ。人や自然など問題解決のための資源はたくさんある」と強調した。

(この連載は津久見支局・是永桂一が担当しました)

U-net 日・有線(11)

6.00	トピックス	17.00、20.00、23.00
6.30	広報	10.00、15.30、20.30、23.30
8.00	大好き総集編	12.00
		18.00、22.00、24.00
11.00	ケーブル7再	
13.00	うすきチャンネル	
14.00	素白(11月)再	19.00

CTS 佐伯・有線(12)